

膜瓣にして、内腔に向つて輪狀に縁を形成し、縁よりは二十餘個の觸手 [Tentakel] を發生す、此ものは水管腔と鰓腔との境界たり、

鰓腔及鰓囊 鰓腔は廣潤なる囊腔にして、殆ど動物の全體腔を占む、其周圍は鰓囊を以て限られ、後下方に於て營養管腔に通ず、○鰓囊は、上は觸手輪に、後下方に於て營養管に附着する大囊にして、其外面は、横走する多くの血管を以て輪狀に圍まれ、且つ血管より生ずる無數の枝を以て體壁に結合せらる、體壁と鰓との間には端足類の一種を容るゝこと殆ど普通なり、内面は八個の縦襞を有する外、後壁に沿へる一個の舌襞及び前壁に沿へる一個の腹溝 Bauchrinne を具ふ、舌襞及び腹溝は營養管に關するものなれば、此に説かず、縦壁は外面に於ける輪狀血管の引締めによつて生ずるものにして、其構造は他部と異なることなし、鰓の構造は、規正に縦横に格子狀をなせる血管網にして、格子眼には猶ほ縦に平行せる小血管を具ふ、鰓孔より觸手の作用に依て流入する海水は、此格子眼を通過して體腔に出て、排出口より體外に排出せらる、其際血管内の老廢血液は、交流作用によりて血管壁を透して酸素を請取り炭酸を放出す、此格子眼の膜面には顛毛上皮を有せず、蓋し觸手の運動は、別に顛毛の補助を要せずして水を流動すればなり、

(未完)

文 苑

涵 養

稼 堂 陳 人

人の氣中にあるは、魚の水中にあるがごとし。といにしへの人のいひけむやうに。魚は

いくるより死ぬるまで。清水にひたされて。その身は肥えぬへく。人はわかきより老ゆるまで。賢人に化せられて。その性は長じぬべし。人の徳を修め。藝を學ぶ。この養なくば。あるへからず。故にかしこきに交らんは。正蘭の室にあるがとく。久しくして。その香をきかす。きうざるは。その身のかしこきに化りぬるなりともいへり。その身既にかしこきにうつりて。そのよきを覺えぬは。人の氣中にありて。氣を覺えず。魚の水中にありて。水を覺えぬがごとし。是を身を君子の水に涵し。心を正蘭の室に養ふとやいふべからん。藝も徳も。なごか成就せざらんや。されども。一朝にして得べきにあらず。長く月日を重ねて。その効はみゆへし。急くへからず。徳性なごハ尤もこの養ひなくハ。叶ふまじ。かれ徳性を養ふに。涵養のもじを用ひたる。古人の意深し。

物事の沿革と窮むへき話

全

人ぎえつけんどおもはゞ。はやくより。いさゞげなる物事なりとも。そのすぎこし方の沿革をあなぐりて。んどの心。ふりおこすべし。藝業のその身につく。これよりは。やきはなかるべし。その索ぐることの。よく知らるゝのみにあらず。これによりて。かの事。この事。明になりぬること。五も六も。ありぬべし。たとへば。中國すぢの寄港船にのりて。九州に下るかどくなるべし。神戸を出て。門司の港にはてんは。その志さす所なり。これによりて。安藝の宮嶋にも。たちよるべく。周防の岩國も。見わたさるべし。一の沿革をみると。百の沿革をえる。こゝに至りては。その物その事。皆おのか物となり